





和蘭文譯第一集

青木文藏撰

此書家藏十冊其年之次は三集六集八集九集十集の五冊に存す其年曆と推して此年第一集と相審し故に書名を括し

青木文藏撰

和蘭文譯第二集

青木文藏撰

二月天定方流川六藏等改番御用子て京都に上り四月押町上皇廟御因て中途歸東

和蘭文譯第三集

青木文藏撰

阿蘭陀本草和解野呂元文撰

流川六藏撰

三月和蘭文譯第三集

青木文藏撰

十一月八日冬至京都西八條梅小路司天臺に於て淫陽頭土御門泰邦及天文方西川忠次郎

滋川園書等立會て立表測景の規式を創む

此時所用の測器は八丈長表八寸針表及四近儀針天儀等用真等教規とて京都方辦事に西村千船藏水指四郎とて江戸吉川山路

西川忠次郎撰

和蘭文譯第四集

青木文藏撰

林子平政徳川家人岡村源吾兵衛頭次子より父有故棄祿因稱林氏は平兄嘉膳故仙臺藩士

と爲り子平時年十五

後三年度兄仙臺移住

因村長通家録六百石書物奉行なり岡村源吾兵衛の企して岡田を棄て岡村の許に在り連判帳と示す良通一見一語其云某堂見の

初書り某と連判帳人申す父某首領に望み奉りて長通一カ下下林政し連判帳を次申して跡を略り岡村氏の心元又度中

某月の年より春現況に其愛重と基かし建てるに及んで天命と終らざる心と岡田の誓ひ成りたり又仙臺閣証正録第

五巻と作り林子平時乃力あり

林子平撰

寶曆

和蘭文譯 第七集 青木文藏撰

護收人平賀源内先是長崎遊學和蘭諸藝術之習得是年江戸に出

源内名國傳号越後守和蘭の蘭語(主)主傳和蘭書院内各其後段と云、後丁未其比の蘭語、及以內今に至りて

四村元雄名譽筆藍水江戸人其四道堂元雄傳書物並其名所聞

和蘭語訳  
三田村文藏撰

閏二月京都官醫山脇東洋小漢藩醫小杉玄道と始て罪囚の屍體と解き臟腑を實驗し仍て

臟志と作て我國解剖の舉て東洋之最先とす 後五年己卯刊行

東洋名詞漢字並其考、嘗て漢語内蔵説、其考、其師後藤良山、曾て良山曰く、屍を解き、若くは、然其容男、人體を解

く、屍を解き、其考、其師後藤良山、曾て良山曰く、屍を解き、若くは、然其容男、人體を解

十一月寶曆甲戌元曆頒行 勅曰貞享以降距數十年用一層拒歩之法與天差矣今立表測景

定氣朔而治新曆以頒之於天下

今名又ヘッロンス、内河蘭人、開クモノリ記シテ和蘭文譯六集、云 其儀青木取書藏

寶曆甲戌、六十餘年曆考、天、後、三、六、刻、有奇、九、年、曆、作、改、法、命、カ、リ、シ、ク、昔、京、時、軍、製、儀、の、書、初、より、改、曆、の、事、若

和蘭文譯 第七集 青木文藏撰

七月江戸天文臺に於て秋分點測定 十月冬至點測定

正月天測御用として流川圖書山路彌左衛門再上京先是西川忠次即蒙罪問君身亡家絶

四月初蘭文譯第八集 青木文藏撰

今名又ヘッロンス、内河蘭人、開クモノリ記シテ和蘭文譯六集、云 其儀青木取書藏

西川忠次傳  
青木文藏撰



